

論文

「コンサベーション」の理念

——アメリカ合衆国自然保護運動の発展と資源管理政策——

森 下 直 紀*

はじめに

アメリカ合衆国における、史上最初の自然景観に対する国民的議論の的となったヘッチ・ヘッチィ渓谷は、現在その大半がオシャネシー (O'Shaughnessy) ダムによる人造湖の水面下にある。1923年に完成したこのダムは、その設計耐用年数が近づいており、近年、このダムを撤去し、元の渓谷の姿に戻そうとする動きが盛り上がりを見せている¹⁾。

本論の目的は以下の2点である。第1に、ヘッチ・ヘッチィ渓谷におけるダム建設をめぐる論争の背景にある歴史的経緯を概観し、第2に、国立公園内に建設されるダムを承認する政策決定と「コンサベーション」²⁾運動との関連を明らかにする。

これまで、ヘッチ・ヘッチィ渓谷という国立公園内の特定地域のダム開発をめぐる対立は、ジョン・ミューア (John Muir) とギフォード・ピンショ (Gifford Pinchot) という、個人思想による二項対立的な図式で語られる傾向にあった。チャー・ミラー (Miller, 2001) が、ロデリック・ナッシュ (Nash, 1967=82) やステファン・フォックス (Fox, 1981) を批判する点は、まさにこの二項対立的な図式によって、ピンショの主張が誤って理解されているということであった。ミラーはこの二項対立について、エコロジーといったものの議論が、ミューアやアルド・レオポルド等のエコロジストによる著作を中心に論じられており、その対極の位置にピンショが位置づけられてしまっていることを指摘している (Miller, 2001: 7-8)。

本論では、19世紀までの西漸運動と自然保護運動の興隆の歴史によって、審美的自然保護主義と「コンサベーション」運動との間に存在した認識の差異が、ヘッチ・ヘッチィ渓谷におけるダム建設をめぐる対立とともに、公共政策論における「コンサベーション」の理念を、アメリカ合衆国環境史における新たな展開として提示する。

第一章 自然保護運動の成立

アメリカ合衆国のある北米大陸はクリストファー・コロンブスの探検旅行によって発見され、アメリゴ・ベスプッチによって新大陸であることが示された。1607年にバージニア州のジェームズタウンに植民地が建設されて以来、新大陸へとたどり着いたヨーロッパ移民たちはその旺盛な好奇心を辺境の開拓に注ぎ始める。1776年のアメリカ合衆国独立宣言以降に流入し始めた移民たちの多くは、ヨーロッパの様々な地域から家族とともに移住してきた。北米大陸にはすでに先住民が生活していたが、そこを一生の棲家と定めた移民たちは、西へ西へとまだ見ぬ土地を求めて移動を開始した。

その動きを助長するように、独立後のアメリカは複数回にわたって他国から領土を取得した³⁾。1平方マイル当たりの住民が2人以上存在する開拓された土地と、開拓されていない土地を分ける便宜上の線がフロンティアであり、

キーワード：コンサベーション、ギフォード・ピンショ、ジョン・ミューア、ヘッチ・ヘッチィダム論争、フォレスト・サービス (森林局)

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 生命領域

1890年の連邦政府によって「フロンティア終焉」が発表されるまでの間、フロンティアの移動による西漸運動が続くことになる⁴。ヨーロッパからの移民たちは、北アメリカ大陸のダイナミックな地形を短期間のうちに経験することで、その自然をヨーロッパには無いものとして受け入れ、アメリカ人としてのアイデンティティを形成していった⁵。歴史学者のフレディック・ターナーは、このフロンティアの動きが「アメリカの発展を説明する」とさえ主張した (Turner, 1996: 1)⁶。

しかしこの発展の波は、同時に強い反動を生み出すこととなった。野鳥の絵画を描いたことでよく知られているジョン・オーデュボン、野鳥の観察をしながら全米を旅している途上、1812年ごろにヨーロッパから流入する移民と文明が驚くべき程の短期間で、森を消し、動物を追いやっていると嘆いている (Audubon, 1999: 522-3)。また、インディアンの営みを描いた画家のジョージ・キャトリンは失われていく自然を守るため、現在の国立公園のような趣旨で、「国民公園 (A Nation's Park)」の設置を1832年に提唱している (Miles, 1995: 4)。19世紀の中期になるとロマン文学の潮流に旅行文学が合流し、自然随筆がアメリカ文学の様式を獲得し、それに伴い鳥類学などの学問も注目を集めるようになり、自然保護運動の基礎が形作られてくる。

また、1833年に大衆日刊紙『サン』が発行された。このような情報媒体が成立することによって、政治、文化などの情報が一般の人たちにも容易に手に入れられるようになり、開発と保護をめぐる議論の土壌が形成されたことでも無視できない⁷。

19世紀後半になると、大衆一般紙や書籍の影響もあり、具体的な自然保護を求める動きも広がり始める。例えば1857年、サミュエル・ハモンドは『北部の野生景観』⁸で、ニューヨーク州北西部にあるアディロンダック山地の保護を提唱し、またジェームズ・ローウェルは雑誌『クレヨン』において、当時「発見」されたばかりのカリフォルニア・セコイアなどのアメリカ固有の木々を保護するための協会の設立を訴えた。また、1860年から61年にかけて、トーマス・キングはカリフォルニア州ヨセミテ渓谷についての一連の著作を発表し、カールトン・ワトキンスが作成した初のヨセミテ写真集は、東部の人々に対してヨセミテの自然の素晴らしさを知らしめた。

アメリカ合衆国の公使であったジョージ・マーシュが『人間と自然』⁹を刊行し、人為的活動の破壊的影響を論じて人間と自然との共存を訴えた1864年は、62年に44歳で没したヘンリー・ソローの遺作、『メーン州の森』が発表された年でもある (Marsh, 1864)。そして、アメリカ連邦議会はヨセミテ渓谷を自然保存地区としてカリフォルニア州に付与することを認める決議を行い、これを受けて『ニューヨークタイムズ』はアディロンダック山脈の州による獲得を提案した。この1864年はアメリカ合衆国の自然保護史において、もっとも重要なエポックの一つといえることができる。

この頃になると、多くの探検隊が政府や大学によって組織され、保護すべき自然景観を探求し始めた。また、市民グループによるナイアガラ滝保護運動も開始された。自然保護意識が市民の間でも生まれ、保護運動は加速していく。1869年、ウィリアム・マーレイは『野性の冒険』¹⁰でアディロンダック山脈のレクリエーションと精神的再生 (spiritual renewal) における有用性を訴えた。この影響により、旅行者がアディロンダックに集中するという問題を生み出したものの、地域景観保護の重要性に対する意識が高まったことも事実であった¹¹。ファーディナンド・ハイデンの1867年からの合衆国地質学調査隊 (Geological Survey) は71年にイエローストーン地域に達し、同行した写真家のウィリアム・ジャクソンや画家のトーマス・モランの作品が西部の風景の素晴らしさを東部の人々に伝えた。

ヨセミテ州立公園の設置に象徴的なように、これまでの自然景観保存運動の高まりは一つのピークを迎える。ハイデンの調査隊がイエローストーン地域に達した1年後というすばやさで、連邦議会は「国立公園としてイエローストーン川上流付近の特定地域の保存に関する法」を可決し、世界史上最初の国立公園である、イエローストーン国立公園が誕生した。

しかし国立公園を成立させた自然保護運動は、通り一遍な発展を示し現在に至るわけではない。如何に広大なアメリカ合衆国とはいえ、広範な地域を自然保護区にすることで産業開発を制限すれば、人口集積によってますます高まる資源需要と抵触せざるを得なかったからである。とりわけ、西漸運動の中期から始まった自然保護運動の影響により、地域面積当たりに占める自然保護区の割合が高い西部諸州において、この自然保護運動と資源需要の高まりというジレンマは切実な問題となっていった。

第二章 連邦政府による自然管理

国有林制度の誕生は国立公園の誕生と比べてやや遅れて始まった。既に胎動を始めた国立公園という自然保護政策を横目に、森林保護という題目を提出することの狙いは、当時の主要な燃料や建築資材が木材であったという産業背景を見ればおのずと明らかになる。

イエローストーン国立公園の誕生の翌年、1873年にアメリカ科学振興協会の年次総会がメイン州ポートランドで開かれ、マーシュの『人間と自然』の影響によって、「森林保護における政府の義務について」¹²と題された論文が報告された。これにより森林保護に対する請願書が同会から提出されることになり、森林保護へ向けた連邦議会の関心が高まった。これを受けて議会は樹木育成法（the Timber Culture Act）¹³を定め、10年間に渡って4分の1の土地に木を植える場合、開拓者に最大160エーカーの土地を与えることを認めた¹⁴。そして1875年には、連邦議会は「政府保留地並びに購入土地に於ける、樹木保護法」を可決した。翌年、ミューアもまた『神の最初の神殿：森林保護は如何に行われるべきか』¹⁵において、政府による森林保護を訴えた。

1876年、連邦議会はフランクリン・ホウを初の連邦森林官に任命し、合衆国の森林状態に関する統計資料を作成させた。翌年、カール・シュルツが、森林保護区の設置と連邦森林局（Federal Forest Service）の設立を目的として内務長官に就任し、これまでの森林保護の動きをいっそう加速させた。また、連邦議会は砂漠土地法¹⁶を可決し、土地を灌漑することを条件に1エーカー単位\$1.25で最大640エーカーまでを申請者が購入できることを認めた。

1878年のジョン・パウエルによるロッキー山脈地域の地質学調査の結果が『合衆国乾燥地域の土地に関する報告』として出版され、報告のなかでパウエルは西部の土地を民主的に開拓者に解放することを求めた。またホウは連邦議会の初期の森林活動の成果である、森林学（Forestry）に関する4巻からなる報告書を連邦議会に向け提出し始めた。そして翌年連邦議会は公有地をその種類に応じて分類するために、内務省内に合衆国地質学調査所を単一部局として設立する法案を可決した。

こうした動きが政策となって具体化するのには、1891年に議会を通過した「樹木育成法の廃止及びその他の目的に関する法」の成立であった。同法は、森林面積を増やそうという意図にもかかわらず実際には具体的効果をあまり発揮できなかった樹木育成法を廃法し、大統領権限で森林保護区の設置を認めた。同年、ベンジャミン・ハリソンは大統領令により、ワイオミング州に合衆国史上最初の森林保護区を設置した。

1896年に連邦議会は農務省内に生物調査部を設置することを認める法案を可決し、1905年には生物調査局へと規模を拡大する。これら一連の動きに呼応するように、全米科学学会はチャールズ・サージェントを議長に据え、森林に関する委員会を設置した。ピンショを最年少委員とし、ミューアをオブザーバーとしたこの委員会は全米の森林の調査を行い、その積極的な管理を訴えていくことになる。翌年には森林管理法が議会を通過した。この法律は木材、鉱物、牧草資源のために森林保存区を設けることを明確化し、1960年代までの森林管理の青写真を提供することとなった。

1898年にピンショが農務省森林部をホウから引継ぎ、科学的な手法によって積極的な土地管理を推進した¹⁷。その端的な表れとして、1899年のウィリアム・スミスの『乾燥したアメリカの征服』がある。スミスは乾燥地における大規模な灌漑が、将来の自然資源の確保において有効な手法であると主張した（Smythe, 1899=1905）。この考えは、1902年の新土地耕地化法という特定の州及び領地の乾燥地帯の耕地化を目的とした灌漑に対する公有地の販売・譲渡を認める法案の成立へと発展していった。

1901年に成立した適正使用法（The Right of Way Act）はアメリカ合衆国の自然保護政策において重要な意味を持つことになった。同法は電力・電話・電信・灌漑・水道に関して、森林保護区と国立公園内の使用法を定めたもので、ヘッチ・ヘッチイ溪谷のダム建設においても重要な影響を及ぼした。

適正使用法が成立した年は、セオドア・ルーズベルトがマッキンリー大統領の死去により第26代大統領に就任した年でもある。マッキンリー大統領の環境行政を支えてきたルーズベルトは、その就任演説で森林保護区を原野の維持を目的として活用することを求める一方で、西部の乾燥地帯における灌漑政策の必要性を主張した。

ルーズベルト政権がおこなった主要な環境政策の一つに野生生物保護区の創設がある。原野の消失とともにこの

時期重要な関心事であった野生生物の絶滅問題への危機感は、野生生物の州外への持ち出しを禁じた 1900 年のレイシー法や、1902 年の狩猟対象となる動物を保護することを目的としたアラスカ狩猟法などが相次いで成立したことに現れている。1903 年、ルーズベルトはこうした流れを汲み取り、野性の保護をも併せ持った保護区をフロリダ州ペリカン・アイランドに設置した。彼はその後も在任中 53 の鳥獣保護区域を設置している。そして公有地の問題について研究し報告することを目的に公有地委員会 (Public Lands Commission) を設置し、そのメンバーとして選ばれたのは、リチャード、ヌーエル、そしてピンショーであった。

ピンショー等の働きかけにより、アメリカ森林協会 (American Forestry Association)¹⁸ はワシントンにおいてアメリカ森林会議 (the American Forest Congress) を開催し、製材業・鋳業・畜産業・灌漑産業のトップや教育分野及び政府の指導者が一同に会した。森林会議は自然資源管理の必要性を訴え、その要請によって森林保護区の管轄が内務省土地管理局から、農務省森林局へと移管されることとなった¹⁹。

これに続いて翌年の 1906 年、ピンショー等は国立公園の管轄も森林局へと移管する法案を準備したが、下院公有地委員会の議長であったジョン・レイシー議員 (Republican) の働きかけにより阻止される。そしてこれをきっかけとして内務省内に国立公園を管轄する永続的な機関の設置への活動が活発化し、1916 年の国立公園局設立法案の成立へと続いていった²⁰。

レイシー議員をはじめピンショー等の自然資源制度の改革に否定的な向きは、森林局のさらなる拡大によって、ピンショーが自然資源に関する自らの政治的影響力強化を目的とする制度改革であったと見なす傾向にあった。しかし、そうした観点から 1907 年の彼の行動を説明するのは難しい。19 世紀終わりのころから更なる自然保護区の設置は移住者たちをいらだたせはじめていた。森林保護区を「国有林 (National Forest)」と改名することを定めた法律は、自然保護区のさらなる増大を快く考えない人々の影響によって、西部の 6 州 (オレゴン州・ワシントン州・アイダホ州・モンタナ州・コロラド州・ワイオミング州) においてこれ以上の国有林の設置或いは拡大を禁止することを定めていた²¹。しかしピンショーは、この事態に際してすばやく行動を開始した。この法案が議会を通過した 2 月 25 日からルーズベルト大統領がこの法案に署名する 3 月 4 日までの短い間、部下と共に活発に働き、西部 6 州にまたがる 1,600 万エーカーもの土地をルーズベルト大統領に国有林として認めさせた。

第三章 保護と開発のカリスマ

1890 年以降、西漸運動における急激な発展の波は、もはや手付かずの土地をもてあましているという段階ではなく、残り少ない手付かずの土地をどのように処遇するか、保護地区となった土地をどのような目的で使用するかという段階に達していた。「フロンティアの終焉」という政府の発表も、そうした危機感からのものであると捉えることができる。その意味において、農務省森林局 (Forest Service, Department of Agriculture) の初代長官にして、「コンサベーション」運動の中心的人物であった、ピンショーの「野性とそれ以外を隔てる境界線は引くことができない」(Pinchot, 1947: 94) という主張は当時において的を射た考え方であったと思われる。

1905 年に森林局の初代長官に就任する以前から、ピンショーは一貫して功利主義的な「コンサベーション」を論じ、それは木材や石炭などに加え、水資源等の自然資源を持続的に使用するために、政府はそれら資源の使用を規制しなければならないと主張した²²。

ピンショーをはじめとする、「コンサベーション」運動の推進者たちは、自由主義経済を基本に据え、必要最低限の政府による規制を伴って豊かな自然資源を活用していくという考えであった (Miller, 1992: 7, Koppes, 1988: 234-5)。その反対に野性を野性のまま維持させようとする、後に審美的保護主義 (aesthetical conservationism) あるいは保護主義 (preservationism) と呼ばれる考えも台頭していた。これら二つの考えはサンフランシスコ市に安定的な水の供給を目的として、ヨセミテ国立公園のヘッチ・ヘッチィ溪谷に利水ダムの建設が提案された際に激しい論争を巻き起こすことになった。

ピンショーの友人であり良き指導者でもあったミューアはシエラクラブの代表として、ヘッチ・ヘッチィの美しい景観を水の底に沈めてしまうことに激しく反対したが、ピンショーは行政官として、将来を含めたサンフランシスコ市とその周囲に住む人々の需要と比べ、ダム建設がより重要であると考えていた。サンフランシスコ市は水資

源に乏しく、水量の調整に苦慮したほか水会社の寡占状態が続いており、その状況を打開するためにダム建設は必定であるというのが、サンフランシスコ市当局の主張であった。ダム建設の是非をめぐる論争は長引いたが、1913年にダムが建設されることとして決着することになる。しかしこの論争は、自然の開発をめぐる初めての長期にわたる国民的議論であったとされている²³。

ミューアは、彼が特に自然保護に対して影響を及ぼしたい人物との会見を行う場合、山中で会うことを常としていた。しかし、ミューアとピンショーとの初めての出会いがヨセミテ渓谷でなかったのは意外な事実である。というのもヨセミテ渓谷は、ミューアが初期の自然保護運動の指導的役割を果たす人々との関係を構築する主要な場であったからである。1892年に彼らが初めて会見したのは、ハミルトン郡にあるネハサネ公園であった。そこでミューアとピンショーは数日間を過ごし、「決して忘れないだろうし、忘れたくない旅だった」と親友のフリッツ・ハレットに語っている (Pinchot, 1947: 74)。その後もミューアはピンショー家の招きに応じて歓待を受けるなど、親交を深めていった。そうすることでピンショーの両親は、当時28歳のフォレスターとしてのキャリア形成に役立つものと考えていた²⁴。そしてミューアもその期待に応じるかのように、指導的役割を自らに演じさせ、この若い後輩の育成に助力を惜しかなかった (Miller, 2001: 125-35)。ピンショー自身はミューアを敬愛し、ミューアの話聞くことによって「森林学を学んでいる」と妻に語ったほどであった (Steen, 2001: 73)。

2人が共に旅をするのは1896年の森林委員会による西部調査旅行が最初となった。彼らは始めて共に旅をする経験を純粋に喜んでいたが、森林委員会における彼らの立場は大きく異なっていた。ミューアは公の場における意見の中立性を重要視し、政府からの委員就任要請を断っていたので、オブザーバーとしての参加であった。一方のピンショーは委員会の役職 (Secretary) を務めており、中央権力への距離という点においてミューアの立場とはかけ離れていた (Cohen, 1986: 317-20)。

そういった傾向を反映するように、ピンショーは1897年に内務省の特別森林官 (Special Forest Agent) として任命された。森林委員会の委員長を勤めたチャールズ・サージェントはディートリッヒ・ブランディス卿²⁵への手紙で、彼自身のハーバード大学の科学者としての考えから、特別森林官の職を得るというピンショーの判断を酷評し、さらに将来の森林委員会を担う人物として秘書官に任命したことを後悔し、「彼は政治家になった」と糾弾している²⁶。しかし、ミューアはピンショーが内務省において職を得ることを歓迎し、森林保護区の再評価・再画定の仕事の一翼を担うことになるとして、異なった立場ではあれ同じ目的を達成しうる仲間として認めていた (Pinchot, 1947: 33)。ピンショーもその期待に沿う形で、合衆国地質学調査所の主事 (director) であるチャールズ・ウォルコットから森林保護区の境界線問題に対する全権限を付託される形で請け負った際、ミューアにシエラ地域において現在の保護区に組み入れられるべき土地はどこかを尋ねている。ミューアは「スタニスラウス川から南方のタホー湖の周囲の地域と、既に荒廃してしまったが、シャスタ地域を保護するべきだ」と提案した。このやりとりを通して、ミューアはピンショーが適切な時に適切な役職にいたることを考えた。ミューアが提案した地域の大部分がまさしくその通りに保護区となったからである (Miller, 2001: 134-5)。

ミューアとピンショーの2人の意見が公の場ではじめて大きく対立したのは、先述した森林委員会での最終報告書へ向けた議論の場でのことだった。各委員の議論の中で、委員会の意見が大きく2つに分かれてしまった。土地の開発を禁止すべきとするミューアが属していたグループと、もう一方は森林の存続に対して重要なことは、専門的な行政事務に則った適切な利用が重要であるとするピンショーが属していたグループであった。2つのグループの意見は平行線のままであったが、報告書の提出期限が迫ってきていたため、議長のサージェントにより多数決による議決提案がなされた。その結果、クリーブランド大統領に対して保護地域の拡充と、鉱業及び林業を制限することによって開発を禁止し、陸軍によって保護地域の警備を行うことを提案したのであった (Miller, 2001: 136-7)。

しかし森林委員会での2人の間の意見の相違はまだ決定的なものではない。というのも2人が上述した森林委員会の仕事に携わっている間に、雑誌『センチュリー・マガジン』に対して、ミューアが寄稿した論文「森林保護計画」において、ミューアはピンショーと同様に森林は木材の供給源であり、どのように保護し使用するかが問題だと述べているからである (Muir, 1909: I-36)。

1898年にピンショーが森林局の前身である森林部 (the Division of Forestry) を統括するようになるのと前後して、ミューアのピンショーに対する態度は決定的な変化を見せ始める。この変化が具体化するのが、ヘッチ・ヘッチイ

渓谷におけるダム建設の是非をめぐる議論である。

ヘッチ・ヘッチィ渓谷は氷河とトゥオルミ川によって浸食された渓谷である²⁷。1890年にヘッチ・ヘッチィ渓谷を含む地域を保護することを目的としてヨセミテ州立公園から国立公園へと転換するべく、ミューアや『センチュリー・マガジン』の編集長であったロバート・ジョンソン等が尽力した²⁸ (Muir, 1909a: 2)。彼らの活動が実り、連邦議会はセコイア国立公園 (9月25日制定) 及びヨセミテ国立公園とジェネラル・グラント国立公園 (10月1日制定) の設置を決めた。法案では「全ての樹木、鉱物、自然の奇妙さ不思議さを損傷することから同国立公園を保存し、自然状態の維持」を謳うことで、原生自然 (wildness) の保護 (preserve) という彼らの主張が全面的に取り入れられていることが伺える²⁹。

他方、サンフランシスコ市は1849年から始まったゴールド・ラッシュ以降爆発的に人口が増加し、19世紀後半にはミシシッピー川より西部の最も大きな都市の1つとなっていた。その増加する人口に対して大きな懸案となってきたのが、水資源の確保であった。カリフォルニアの北部に位置するサンフランシスコ市街は、サンフランシスコ湾口の南側、カリフォルニア半島の北端に建設されたが、平野部が少なく、急峻な丘陵地や窪地が多く、後背地が狭い旧来の港町である。このように三方を海に囲まれる同市は、増大する人口圧からくる水資源の確保が市政において重要な課題となってきた。

1882年に、サンフランシスコ市は潜在的な水不足に対応するため、ヘッチ・ヘッチィ渓谷にダムを建設し、パイプラインによって同市まで水を引く計画を発表した。20世紀に入ってから、1903年と1905年にサンフランシスコ市は当時内務長官であったイーサン・ヒッチコックに対してダム建設の許可を求めた。ヒッチコックは国立公園設立の精神に反するとして要求を退けるが、ピンショーは同市からの要求を精査し、ヒッチコックに対してダムの建設は国立公園の質を損なうことは無いと進言した。ミューアはこの進言にたいして激怒し、ジョンソンへ宛てた手紙の中で、「ピンショーが (ヘッチ・ヘッチィ) 渓谷を本当に知っているのなら、ヨセミテ全体を水に沈めても、そこが損なわれないと言うようなものだ」と訴えたという (Miller, 2001: 139)。ピンショーは、ミューアのヘッチ・ヘッチィ渓谷を保護すべきだという主張に対して、サンフランシスコ地域の水の必要性をも鑑みるべきだと主張した。この主張に対するミューアの反論を記した1905年5月の手紙が、ピンショーの所有していたミューアからの最後の手紙であったという (Miller, 2001: 139)。ミューアはダムを建設するために、材木会社が最高品質大木をただで手に入れられるのは不当であり、サンフランシスコ市が真水を望むのであれば渓谷の下流からより大きな費用を支払って水を引くべきであると主張した (Righter, 2005: 8-9)。

ミューアとピンショーの議論が平行線のままお互いの妥協点を見出せなかったように、ダム建設是非をめぐる議論も、結論が出せぬまま長期化していった。そのような状況にあって1906年のサンフランシスコ地震は、同市に甚大な被害を引き起こしただけでなく、ダム建設の是非をめぐる議論の行く末にも大きな影響を与えることになった。地震によって地中に埋設されていた水道管やガス管が破裂することによって大規模な火災が発生し、その火を消し止めるための水が不足するという事態が発生した。サンフランシスコ市が再びダム建設の許可を求めると、新任の内務長官であるジェームス・ガーフィールドは建設計画を承認した。

1907年に、ミューアはこの事態に対して、ヘッチ・ヘッチィ渓谷のダム建設を阻止する為に活動を開始した。『トゥオルミ・ヨセミテの危機』はそのさきがけとして出版されたものである。翌年、ジョンソンが『センチュリー・マガジン』誌に掲載した「水に対する高い代償」はヘッチ・ヘッチィの問題を国民的関心事へと押し上げた。こうした活動により、連邦議会は同渓谷のダム建設の是非をめぐる、その後数年間をかけて公聴会や討論会を開くことになる。

ミューアはこの国民的議論を建設に反対の立場から盛り上げるため、1911年に「私たちの国立公園を脅かす商業的破壊を止めさせ、ヘッチ・ヘッチィ渓谷を守ろう」³⁰と題された小冊子を配布するなど、精力的な活動を続けた³¹。そしてこのヘッチ・ヘッチィ渓谷のダム建設の是非をめぐる国民的議論も終わりに近づいたころ、1912年にミューアはヨセミテの写真を掲載した『ヨセミテ』を出版した。しかし、こうしたミューアたちの反対運動にもかかわらず、翌年の1913年に別名ヘッチ・ヘッチィ法と呼ばれたサンフランシスコ市にダム建設の許可を与えるレイカー法が連邦議会によって可決された。ミューアはこのダム建設をめぐる国民的議論の結果として建設されるダムの完成を待たず、この争いが終結した翌年の1914年に76年の生涯を終えた。

ミューアとピンショアのヘッチ・ヘッチィ溪谷をめぐる対決は伝説的であるが、その伝説性故に、2人の人物を物語の風刺にあるような対極の位置へと押しやってしまった。1970年代以降に環境主義が台頭したが、それ以後の歴史家によって彼らが評価される際の価値基準は、ウィルダネス（Wilderness）という神格化された道德観念であり、それは人間と自然という人為的で政治的な境界線に根ざしたロマン主義を引いていた。このミューアーピンショアという保護と開発をめぐる2人のカリスマによる対立構図が描かれることによって、ピンショアの考えが極端に捻じ曲げられてしまっているとして、従来の議論を批判したのがミラーであった。ミラーは、ナッシュやフォックスのピンショアに対する評価が「不正確で不公平」であるとしている³³（Miller, 2001: 8-9）。そしてそのことは、ミューアの考えに対しても同様のことが起こったのではないかと想像させる。

ミラーの指摘は的を射たものであるが、それでもなお彼はミューア及びピンショアの思想対立という観点から分析しており、それぞれの主張が社会的立場性を帯びていることに十分な注意を払っていないと思われる。このミューアとピンショアという人物の対立から、審美的自然保護団体と自然資源管理行政という対立へと読み替えることによって、ヘッチ・ヘッチィ溪谷におけるダム建設問題を、環境政策史や公共政策論におけるケース・スタディとしてより適切に捉えることができるのである。

第4章 「コンサベーション」の理念

既に述べたように、ヘッチ・ヘッチィ溪谷にダムを建設することは、サンフランシスコ市にとって喫緊の問題であったが、国立公園を管轄する内務省長官は2度にわたって同市からの請求を棄却する。国立公園のダム建設をめぐる保護と開発のパワーバランスは、依然審美的保護主義の側に傾いていた。しかし奇しくも1906年のサンフランシスコ市を襲った大地震が、このバランスに変化をもたらした。地震によって地中に埋設されていた水道管やガス管が破壊され、吹き出たガスから延焼が広がり、消し止めるはずの水は出なかった。結果この災害は全米の同情を呼び、その影響もあってサンフランシスコ市が再び提出したダム建設の要求に対して内務省長官は許可を与えた。

このことは自然資源管理行政の中核にいてダム建設容認の立場をとるピンショアと立場は異なるものの、同様に自然保護区をどのように保護し、どのように使用するかということについて議論してきたミューアに衝撃を与えた。ミューアは今日では最も有名な自然保護団体の一つであるシエラクラブの設立に関わり、生涯その代表を務めた。その組織の代表として、彼はヘッチ・ヘッチィ溪谷におけるダム建設に反対の姿勢をとった。しかし、ミューア自身はダム建設反対論者ではなかった。彼のヘッチ・ヘッチィ溪谷におけるダム建設反対の理由は、同溪谷が他と比較して優れた景観を有しているということであった。1909年にダム建設反対を訴えたパンフレットにおいて、ミューアは他に水を得られる場所が存在することを示し、サンフランシスコ市がヘッチ・ヘッチィ溪谷をダム建設用地に選んだのは、他の候補地が民間水道会社が所有する私有地であることなどから、水資源を得るためにより多くのコストを支払う必要があるからであり、他に適当な場所がないという主張は欺瞞であるというものであった。しかし「サンフランシスコ市にとって、他の場所から水を得ることが出来ないのであれば、この大きな国家的犠牲は正当化されるかもしれない」とも主張するのである（Muir, 1909a: 3-6）。

つまりピンショアとミューアは共に、自然の保護と開発という2つの相反する現実に対して、彼らなりの答えを出そうとしていた。しかし彼らの立場の違いや公共財に対する認識の隔たりが、2人に同じ道を取らせることを許さなかった。

昨今、ヨセミテ国立公園のヘッチ・ヘッチィ溪谷をダム建設以前の自然景観へと戻そうという動きが活発化している。同溪谷に建設されたオシャネシーダムの耐用年数がまもなく経過するのにあわせて、ダムを取り壊しその当時の環境に戻そうという活動である。しかし、サンフランシスコ市やその周辺の集落の水需要が無くなったわけではない。現在のサンフランシスコ市の人口を考慮に入れば、むしろその需要は大きく増大している。オシャネシーダムが無くなれば、その水源をどこか他の場所から得なければならないことは自明であり、それは代替するダムを必要とするはずである。オシャネシーダムを無くし、他のダムから水を供給することは、ミューア等が属していた審美的保護主義を推進する側の最終的な勝利なのであろうか。ダム建設の是非が議論されていた当時に比べ、企業の社会的責任がより強く求められるようになった現代アメリカ社会において、電気や水道といった社会インフラを

民間企業が管理することは珍しくなくなった。それを当時のピンショアの立場に還元するならば、ヘッチ・ヘッチイ溪谷のダム建設是非の問題に対峙した場合、私企業による独占的な水道供給という観点をもってしても、ミューア等の当時の主張であったヘッチ・ヘッチイ溪谷以外の場所に水源を求めるという意見に同調する可能性を無視することはできない。

「コンサベーション」論をアメリカ合衆国がたどった歴史的経緯から抽出することは、単なる自然保護の思想的変遷をたどる歴史的作業であるだけでなく、そのセクター分析から現在の公共政策論が抱える問題を浮き彫りにし、現代社会が抱える持続性を考察するうえでも必要不可欠な作業である。自然保護をめぐる自然利用のあり方と原生自然 (wilderness) 尊重をめぐる対立は、「コンサベーション」の理念に関わる分析なくしては解決できない。それは、「コンサベーション」の理念に内在する問題であり、その内在した問題をめぐる政治的な諸勢力の分析を必要とするからである。その際、「コンサベーション」の根本原理である衡平 (equity) という観点は、当時の政治経済的背景を分析する上で、水資源をめぐる諸派を切り分ける有効なツールである。本論を足がかりに、ヘッチ・ヘッチイダム建設論争を再検討し、「コンサベーション」の理念に内在する政治力学の分析をもって、「コンサベーション」論の核心に迫りたい。それは、アメリカ合衆国環境史における新たな分析手法を提示する一方、開発と保護をめぐる「思想的対立」に対して新たな論点を提出する作業でもある。

注

- 1 ヘッチ・ヘッチイ溪谷の再生に取り組む NPO 法人として Restore Hetch Hetchy がある。http://www.hetchhetchy.org/
- 2 コンサベーション (conservation) という一語が抱える意味の広がりには余りに膨大であり、コンサベーションと言うことで、具体的な何かを意図することは困難である。本論文であつかうヘッチ・ヘッチイ溪谷におけるダム建設問題などの論争において、審美的価値観から、ダム建設に反対する側を「保存 (preservation)」派、国立公園内であっても、資源の適切な利用を目的に、ダム建設を容認する側を「保全 (conservation)」派とする議論が一般的である。しかし、本論ではこの二項対立図式を採用せず、'conservation' の含意を議論することを目的としているので、「コンサベーション」として表記し、資源の公共性に着眼した上で、公共政策における資源の衡平 (equity) な扱いを求める政治的理念として位置づけることとした。
- 3 1803 年フランスからルイジアナを買収し、ミシシッピー川の西からロッキー山脈に至るまでの広大な土地により、合衆国の国土は倍増した。その後も 1818 年イギリスよりルイジアナの北を割譲、19 年フロリダ買収、45 年のテキサス併合、46 年のオレゴン併合、48 年のメキシコ戦争によりメキシコより割譲されたカリフォルニア、53 年のガスデン買収という流れで領土の拡大が続いた。
- 4 1890 年発表の国勢調査報告書によって「フロンティアの終焉」が宣言された。その理由は、移民たちの定住が太平洋側からも開始されたことにより、1790 年に最初の国勢調査の結果が発表されて以来、当時のアメリカ合衆国の領土地図に書き込まれてきた、フロンティア・ラインを地図に描くことができなくなったというものである。したがって、人口密度からなるフロンティアの定義を採用すれば、1890 年時点ではフロンティアそのものは依然として広く存在していた。Selected Historical Decennial Census Population and Housing Counts, U.S. Census Bureau, http://www.census.gov/prod/www/abs/decennial/index.htm
- 5 1837 年のラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) の「アメリカン・スカラー」と題された、「アメリカの精神的自立」を説いたハーバード大学での講演は、アメリカ文化が誕生した瞬間であったとされている。その前年の講演では、自然と人間と神との関係を論じた『自然 (Nature)』を発表し、アメリカのヨーロッパからの精神的自立が北米大陸の雄大な自然を開発していく過程で培った経験に支えられているということを示した。また彼は、ヘンリー・ディビッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) や、ミューア等のアメリカ自然保護を支える人々とも交友した。以下のサイトで、エマソンの著作のテキストを読むことができる。http://www.rwe.org/
- 6 ターナーの『アメリカ史におけるフロンティアの意義 (The Significance of the Frontier in American History)』は 1893 年 7 月 12 日に開催されたアメリカ歴史学協会 (the American Historical Association) シカゴ大会において発表された原稿が出版されたものである。
- 7 アメリカ内務省が設置される 2 年前の 1847 年に、後に人間と自然との共存を訴える『人間と自然 (Man and Nature)』を著すことになる、当時ヴァーモント州選出の下院議員であったジョージ・マーシュがヴァーモント州のラットランド郡農業協会 (the Agricultural Society of Rutland County) において、人為的活動の土地に対する破壊的な影響を憂慮する内容のスピーチを行い、森林管理を呼びかけた (Marsh, 1848)。そして、1850 年には米国特許庁長官のトーマス・ユーバンク (Thomas Ewbank) が木材の浪費、バイソンの絶滅を警告した (Ewbank, 1849)。このように自然保護の潮流は政府高官の意識をも動かし、著名な作家や芸術家が、アメリカ人の精神的資源としての自然を守れというメッセージを発し始める。ソローが『森の生活 (Walden; or, Life in the Woods)』を出版するのもこの時期である。

- 8 原題は *Wild Northern Scenes; or, Sporting Adventure with the Rifle and Rod*。
- 9 原題は *Man and Nature; or, Physical Geography as Modified by Human Action*。初版は、以下の連邦議会図書館オンライン・データベースから閲覧することができる。[http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/r?ammem/consrvbib:@FIELD\(NUMBER\(vg07\)\)](http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/r?ammem/consrvbib:@FIELD(NUMBER(vg07))) |
- 10 原題は *Adventures in the Wilderness; or, Camp-Life in the Adirondacks*。
- 11 この自然景観保存に対するジレンマは、現在に至ってもなお、世界遺産に対する観光問題等において、克服されていない課題である。入園規制を行ったり、バックカントリーと呼ばれる、ほとんど人が足を踏み入れない場所を設定するなどの対策が、今日のアメリカ合衆国の国立公園システムに採用されている。「ヨセミテ国立公園では、夏のシーズン中であるにもかかわらず、人がたくさん入るのはヨセミテ渓谷だけで、公園の残り 95% の部分はバックカントリーと呼ばれ、ほとんど人は入らない。」(岡島, 1996: 68)
- 12 原題は *On the Duty of Governments in the Preservation of Forests*。
- 13 正式には、「西部のプレーリーにおける樹木の成長を促す法 (An Act to encourage the Growth of Timber on western Prairies)」。
- 14 しかし実際には厳正な法の適応はあまり行われず、1891 年に廃法となっている。
- 15 原題は *God's First Temples: How Shall We Preserve Our Forests?*。
- 16 正式には「特定の州または地域における砂漠地の売却に関する法 (An Act to provide for the sale of desert lands in certain States and Territories)」。
- 17 1881 年に設立された森林部の主要な役割は、ピンショ어가長となり森林局に昇格する時代まで、森林行政における情報を分配し技術的提案を行うことにあった。
- 18 現在では American Forests と改称。
- 19 森林保護区の管轄を内務省から移管する法律は Transfer Act と呼ばれ、正式には、An Act Providing for the transfer reserves from the Department of Interior to the Department of Agriculture である。これにより森林部 (Division of Forestry) は森林局 (Forest Service) となる。
- 20 国立公園は個別の立法や政令により設置され、所管省庁も統一されていなかった。1916 年に制定された国立公園局設置法 (the National Park Service Act) により、従来の国立公園と、国有記念物 (national monument) および国有保留地 (national reservation) を統一的に管理する組織として国立公園局が連邦内務省内に設置された。
- 21 the Forest Service sub-section of an Agriculture appropriations act
- 22 とはいえ、ピンショ어를はじめとする「コンサベーション」を主導する立場にある人たちは socialist ではない。Koppes によると、「コンサベーション」と socialist を隔てる差異は、政府による直接的な資源の開発や生産活動がおこなわれるかどうかにある (Koppes, 1988: 234-5)。
- 23 ヘッチ・ヘッチ渓谷におけるダム建設問題に先立って、東部のアディロンダックの保護問題があるが、こちらは国民的議論とはならなかった。ミューアを擁するシエラクラブや、雑誌『センチュリー』の編集長であったロバート・ジョンソンの影響などを無視することはできない。
- 24 ミラーによれば、ピンショ어가自然資源管理を志すようになるきっかけを与えたのは、彼の父親であったという。ピンショ어의祖父の代から続くファミリービジネスの結果として、森林を破壊してしまっていることを理解した彼の父親は、ピンショ어に森林学 (Forestry) の修養を提案したという。したがって、ピンショ어가自然資源保護の道に入るには、十分な個人的理由が存在していたのである。(Miller, 1992: 5-6)
- 25 ドイツ人植物学者で、当時の森林学の指導的立場にあった人物。英国植民地インド領における科学的森林管理を確立した人物として知られる。ピンショ어도、ヨーロッパ留学時代に英国で会見している。森林学と英領インド植民地の関係は以下の文献を参照。Winters, Robert K., 1974, "Forestry Beginnings in India," *Journal of Forest History*, Vol. 19,, No. 2. 水野祥子, 2006, 『イギリス帝国からみる環境史』岩波書店。
- 26 ミラーの記述によれば、サージェントがミューアに送った手紙の中にブランディスへの手紙の内容が書かれていた (Miller, 2001: 134)
- 27 ヘッチ・ヘッチ渓谷が氷河の侵食によって形成されたことを示したのは、ミューアである。
- 28 ジョンソンがヘッチ・ヘッチ渓谷を含む地域を国立公園にするべくおこなった一連のキャンペーンの一部として、ミューアは「ヨセミテの至宝 (The Treasures of the Yosemite)」及び、「ヨセミテ国立公園の特色 (Features of the Proposed Yosemite National Park)」を『センチュリー・マガジン』に提供した。
- 29 U.S. Statutes at Large, Vol. 26, Chap. 1263, p 651. "An act to set apart certain tracts of land in the State of California as forest reservation." (H.R. 12187)、引用部分の原文は "provide for the preservation from injury of all timber, mineral deposits, natural curiosities, or wonders within said reservation [s], and their retention in their natural condition."
- 30 原題は Let Everyone Help to Save the Famous Hetch Hetchy Valley and Stop the Commercial Destruction Which Threatens Our National Parks。
- 31 ジョンソン等をはじめとするダム建設反対論者の論文をまとめ、さらに小冊子の最後には、大統領やそれぞれの地域選出の連邦議会議員

員にあてて建設に反対である旨の手紙を送るなどの具体的な反対活動の手引きも添えられていた (Muir, 1909a: 20-1)。

- 32 ミラーが依拠しているフォックスの文献は1987年に出版された、『ギフォード・ピンショールとアメリカ保全運動における彼の立場 (Gifford Pinchot and His Place in the American Conservation Movement)』、ナッシュの文献は1984年に出版された『ギフォード・ピンショール (Gifford Pinchot)』である (Miller, p.382)。

参考文献

- Audubon, John James, 1999, *Writings and Drawings*, the Library of America.
- Cohen, Michael, 1986, *The Pathless Way: John Muir and American Wilderness*, University of Wisconsin Press.
- Conference of United States Governors, 1908, *Declaration by a Conference of United States governors*, <http://www.pbs.org/weta/thewest/resources/archives/eight/conconf.htm>.
- Emerson, George B., 1846, *A Report on the Trees and Shrubs Growing Naturally in the Forests of Massachusetts*, Boston: Little Brown and Co..
- Espinoza, Allan R.R., 2003, *Origin of the Nation's Park Idea*, <http://www.ecoturismolatino.com>.
- Fox, Stephen, 1981, *The American Conservation Movement John Muir and His Legacy*, Boston: Little Brown.
- Koppes, Clayton R., 1988, "Efficiency, Equity, Esthetics: Shifting Themes in American Conservation," Worster, Donald, ed., *The Ends of the Earth: Perspectives on Modern Environmental History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Library of Congress, *Conservation Collection*, <http://memory.loc.gov/ammem/amrvhtml/conshome.html>.
- Marsh, George Perkins. 1848. *Address Delivered before the Agricultural Society of Rutland County. Sept. 30. 1847*. Herald Office.
- , 1864. *Man and Nature; or, Physical Geography as Modified by Human Action*. New York: Charles Scribner.
- Miles, J.C., 1995, *Guardians of the Parks: a History of the national Parks and Conservation Association*, Washington. D.C.: Taylor & Francis Publishers.
- Miller, Char, 1992, "The Greening of Gifford Pinchot," *Environmental History Review*, Vol. 16, No. 3, 1-20.
- , 2001, *Gifford Pinchot and the Making of Modern Environmentalism*, Island Press.
- Muir, John, 1895, "A Plan to Save the Forest," *The Century*, Vol. 49, Issue 4, pp.630-1.
- , 1909a, "Let everyone help to save the famous Hetch-Hetchy Valley and stop the commercial destruction which threatens our national parks," Pamphlet, <http://rs6.loc.gov/gc/amrv/vg50/vg50.html>.
- , 1909b, *Our National Parks*, Houghton Mifflin.
- , 1997, *John Muir : Nature Writings: The Story of My Boyhood and Youth; My First Summer in the Sierra; The Mountains of California; Stickeen; Essays*, Library of America..
- Nash, Roderick, 1982 [1967] , *Wilderness and American Mind*, Connecticut: Yale University Press.
- Passmore, John, 1974, *Man's Responsibilities for Nature*, Duckworth; 間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』岩波書店, 1979年.
- Pinchot, Gifford, 1910, *Fight for Conservation*, New York, Doubleday, Page & company.
- , 1947, *Breaking New Ground*, Island Press.
- Righter, Robert W., 2005, *The Battle over Hetch Hetchy*, Oxford University Press.
- Smythe, William E., 1905 [1899] , *The Conquest of Arid America*, Norwood: Bermick & Smith Co.
- Steen, Harold K., ed., 2001, *The Conservation Diaries of Gifford Pinchot*, the Forest History Society.
- Thoman, Ewbank, 1849, *Report of the Commissioner of patents, for the Year 1849*, U. S. Government Printing Office. <http://www.myoutbox.net/poar1849.htm>
- Turner, Frederick Jackson, 1996, *The Significance of the Frontier in American History*, Dover Publication.
- United States General Accounting Office, 1994, "Land Ownership Information on the Acreage, Management, and Use of Federal and Other Lands", <http://www.gao.gov/>
- Wolfe, Linnie Marsh, 1945, *Son of the Wilderness: The Life of John Muir*, Knopf.
- Worster, Donald, 1977, *Nature's Economy*, Sierra Club Books; 中山茂他訳,『ネイチャーズ・エコノミー』リプロポート, 1989年.
- 岡島成行, 1996『アメリカの環境保護運動』岩波新書.

The Idea of Conservation Development: A Study of Social Groups' Confrontation over Hetch Hetchy Valley

MORISHITA Naoki

Abstract:

Past studies of the controversy over the development of a reservoir in the Hetch Hetchy Valley (HHV) of Yosemite National Park have mostly concerned the confrontation between the ideas of John Muir and Gifford Pinchot. This paper focuses, instead, on how the idea of conservation developed in the interactions between three social groups: the Sierra Club, headed by Muir, the Roosevelt Administration, of which Pinchot was a member, and the City of San Francisco, which pushed for the dam.

The results, based on historical documents, are as follows. (1) The City of San Francisco's proposal to build a dam in the HHV started a long debate between the City and the Sierra Club, which opposed the dam, about equity in using natural resources. (2) The Roosevelt Administration attempted to balance the public interests of protecting and developing national parks since many groups in the West wished to develop those lands. (3) To obtain public support, the Sierra Club's campaign against the dam in the HHV was based on aesthetic conservatism and not opposition to the building of dams in general. The author asserts that in the end, the Sierra Club fell into aesthetic value relativism, which reduced the group's persuasiveness.

Keywords: conservation, Gifford Pinchot, John Muir, Hetch-Hetchy controversy, Forest Service

